

新しいアイデンティティ

二年ぶりに台湾を訪れた。一九八〇年代末から毎年つづげられていた「アジア・オーブン・フォーラム」が今回は、台湾のいにしへの首府であり、しばしば日本の京都になぞらえられる、古都台南で開かれたのである。この会議は、米ソ、東西の冷戦に終結の兆しが見え、それに伴って世界政治の局面にも転換への鼓動が感じられるようになった一九八九年に、日本

正論

と台湾の学界、経済界、政界、言論界の有志によって発足させられたもので、今年数えて第十一回。

「十年一昔」という通り、十年という歳月はすべてのものを大きく変える。台湾もむろん例外でない。今回とくに際立ったのは、台湾側から提出された国立政治大学劉義周助教の「台湾民衆の新しいアイデンティティ」と題するペーパーによって、台湾の人々のアイデンティティ(帰属意識)につ

いての興味深い世論調査が発表されたことだ。劉論文はいう。

「台湾人は中国人か?」、「台湾は中国の一部分か?」という

神谷 不二 教授 特別顧問 女学院大学 和英洋学 総研 東洋学

台湾民衆の帰属意識

質問を投げかけたら、おそらく大多数の人々は肯定的な回答をしたであろう。……当時の社会では、大多数の人々が「台湾人は当然中国人であり、台湾は当

然中国の一部分である」ということを心からの信念としていたからである。

今日、われわれが同じ質問を台湾の民衆に投げかけたところ、その回答は三十年前のものとは大きく異なっていた。この社会において、かなりの数の人々はもはや台湾人は中国人であるという事実を、それほど理の当然のように言わなくなっている。

ハイテンポに進む変化

然のように言わなくなっている。

冷静に解明した劉論文

「あなたは中国人か台湾人か」と問われたら台湾の人々はどう答えるか。このデリケートな問題について、劉義周氏は一九九四年から九八年までの五年間にわたり、台湾の住民を客家人(広東省など中国南部出身者)、閩南人(福建省南部出身者)、外省人(大陸出身者)の三つのエスニックグループに分け、また青年世代、中年世代、壮年世代、老年世代の四つの年齢層に分けて入念な意識調査を行った。その結果判明したのは、この五年の間に――ということとは、李登輝総統時代、とりわけ台湾最初の総統選挙が行われて以来――台湾民衆の間に新しいアイデンティティが急速に形成されているという事実である。

新しいアイデンティティとは台湾人アイデンティティ、すなわち、自分を中国人ではなくて台湾人であると位置づけることにほかならぬ。九四年の時点でもすでに、台湾人アイデンティティの回答は全体の二八・八パーセントで、中国人アイデンティティの二四・一パーセントを上回っていた。しかし最多回答は二重アイデンティティ(シンガポール人)と

彼らの大多数は自分たちを中国人ではなく「シンガポ



ンティティ(台湾人であると同様に中国人であるとの自己認識)の四三・二パーセントだった。

だが九八年調査の時点では、台湾人アイデンティティが四四・三パーセントで二重アイデンティティの四二・三パーセントを上回り、対して、中国人アイデンティティはわずか一〇・〇パーセ

感ずるにちがいない。だが重要なことは、それをどう受止めるかという主観の問題ではなく、そこに住む人々がいかなる帰属意識をもっているかという客観的事実である。劉論文は、それを冷静に解明しているのである。

民心獲得に成功した宋氏

最後に、あと約三カ月を迫った次期総統選挙の模様に触れておこう。日本のマスコミ論調では、結局は李登輝氏後継の国民党公認候補連戦氏に落着くのではないかと、といった見方が多いように思われる。けれども、現地の空気はかならずしもそうではなさそうだ。国民党を離党(除名)した無所属候補宋楚瑜氏の集票能力を高く見る声、意外に大きいという。

右の世論調査に表われた台湾人アイデンティティの高まりから推論すれば、宋楚瑜氏は外省人であるというハンディキャップに足を取られそうに思われるのだが、かならずしもそうとはいえないところが選挙の微妙なところかもしれない。宋は台湾省長時代の四年間に民心獲得にすいぶん成功した。対して連戦には、広く大衆にアピールする雰囲気がいまいちという。短いスピーチを一度聞いただけだけれど、私も彼のスタイルにはあまり魅かれなかった。さてどうなるか。

リーアン(シンガポール人)であると称している。その先例に因んでいえば、かつてシンガポール住民の間で起きたのと相通する帰属意識の変化が、九十年代以降の台湾住民の間でハイテンポに進んでいるわけだ。北京政府のリーダーたちはこの傾向を認めることに強い不満と反発を

(かみや ふじ)